クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

―◆―演奏会情報―◆―

２０１１．１２．１（木）　大阪交響楽団第１６１回定期演奏会

（会　場）　大阪　ザ・シンフォニーホール

（曲　目）　［１］Ｈ・プフィッツナー　スケルツォ　ハ短調
［２］Ｈ・プフィッツナー　オーケストラ伴奏つき歌曲集より　※
［３］Ａ・グラズノフ　交響曲第４番

（指　揮）　児玉　宏

（管弦楽）　大阪交響楽団

※（バリトン）　小森　輝彦

―◆―鑑賞記―◆―

［はじめに］

≪披瀝“グラズノフとプフィッツナー”Ⅰ≫と題された今宵の定期演奏会。ほとんど演奏される機会のない作曲家たちをたくさん取り上げ、紹介している当楽団音楽監督・児玉宏氏によるもの。その造詣の深さには、いつも頭が上がらない。
さて、どんな演奏を聴かせてくれたのか、つたない鑑賞記ですがお楽しみください。

［１］Ｈ・プフィッツナー　スケルツォ　ハ短調

プフィッツナーは、１８６９年に生まれ、１９４９年に亡くなったドイツ人音楽家の一人で、当時は、Ｒ・シュトラウスと並ぶ知名度の高い作曲家だったそうで、なぜ、日本だけでなく欧米でもほとんど演奏される機会がないというのは不思議としか言いようがない。
今回の定期演奏会の冒頭に取り上げられた曲・スケルツォは「習作」。とはいえ、　小品ながら群を抜いて素晴らしい作品だ。ドイツらしい響きを持ち、整った体裁、どれをとっても素晴らしく、オーケストラの演奏も、その整い方を忠実に再現し、聴いていて飽きない心地の良い演奏だった。

［２］Ｈ・プフィッツナー　オーケストラ伴奏つき歌曲集より

引き続き、プフィッツナーの作品から、今度は歌曲。恐らくバリトン歌手・小森輝彦氏の歌声は、初めて聴いたが、なかなか良い。ドイツの歌劇場で活躍しているというから、さすがにドイツ語の歌詞の響きが美しく、その深みにまず、感動した。

また発声も綺麗で、バリトンだが高音部がとても通る気持ちの良い響きで、私の好みの発声だった。

全部で６つの歌曲を歌ったのだが、それぞれの歌詞に合った（当然といえば当然だが）表情を音にのせ、その表現力の高さにも感心させれた。とくに、第１曲の「春の空はそれゆえにこんなに青い」という作品では、優しく温かい声色がその歌詞にピッタリで聴き惚れてしまった。

［３］Ａ・グラズノフ　交響曲第４番

３楽章からなるグラズノフの交響曲第４番。グラズノフは、ロシアの作曲家で、リムスキー・コルサコフやチャイコフスキーといったロシア音楽史の前世代と、グラズノフを挟んで登場するストラヴィンスキーやプロコフィエフ、ショスタコーヴィチという現代作曲家を繋ぐ重要な役割を果たした音楽家と言われている。一言では言い表しにくいが、とても良い作品で、ロシア的な部分もあり、わたしは、どことなくショスタコーヴィチ的な音楽観を感じないでもなかったが、要所　要所でヨーロッパ的な響きを含んだ大作だったように思う。いずれにせよ、児玉氏が紹介する作品は、どれも趣きがあり、私は好きだ。

［おわりに］

今回の演奏会の様子は、ＮＨＫ・ＦＭにより収録され、来週１２月１８日（日）午後７時２０分から午後９時までＮＨＫ・ＦＭシンフォニーコンサートで放送される予定です。

是非、この機会にＦＭで聴いてみてはいかがでしょうか。

まず、耳にすることのない作品ですので、コンサート会場にいると想像しながら、お楽しみいただければ幸いです。